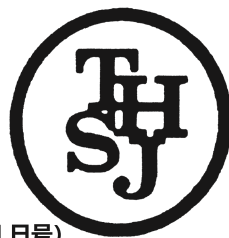


日本ハーディ協会ニュース

NEWS from THE THOMAS HARDY SOCIETY OF JAPAN



第96号 (2024年9月1日号)

発行者 〒577-8502 東大阪市小若江 3-4-1 近畿大学経営学部高橋路子研究室内

日本ハーディ協会 jimu.thsjapan@gmail.com

編集者 金谷益道 〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入 同志社大学



Dorchester の High West Street の様子 (2024 年 8 月編集者撮影)

家をめぐる想像、回想、ノスタルジア

西村 美保

(NISHIMURA Miho)

皆さんは、風景や家に関して日ごろどのような思いがあるのだろうか。日本でも美しい景色を楽しむ場所はあるのだが、少々不便なところが多いかもしれない。風景の点では、外国の方が都市計画のもとにまちづくりがなされていたり、規制があったりと美が保全されているように思う。また、地震が多いこの国では、建物の耐久年数が限られているために、どんどんと景色が変わってし

まう傾向がある。その点イギリスでは古い建物が多く現存していて味わい深いが、それでも、場所によっては、日本同様、カフェや大型ショッピングセンターなど同じような景色に出会うこともある。ドラマや小説はその点、架空のものと分かりながら、美しい風景を楽しめる利点がある。本エッセイでは、風景や家を共通テーマとして、まず、ハーディ小説を連想させる TV ドラマ *Midsomer Murders* のシリーズを、次にイギリスの二つのカントリーハウスとハーディの生家を、最後に家を舞台にしたハーディの詩―”Self-Unseeing”―を取り上げる。

1997 年から放映開始されヨーロッパを中心に大変な人気を博した TV ドラマ *Midsomer Murders* のシリーズには、ハーディ小説との類似点があるように思う。イギリスの静かで美しい田舎を舞台に、様々な殺人事件や悲劇が起こる。バーナビー警部が捜査で訪れる家はコテージからカントリーハウスまで多種多様で、その内装や家具も興味深く、住んでいる人々の暮らしが窺い知れるものだ。また、パブも必ずと言ってよいほど、登場する。登場人物も、ユーモラスで無害に見える人から凶悪に見える人まで実に幅広い。こんなイベントがあったら面白そうだなと思わせるようなフェスティバルやコンペティションもよく開催され、ローカルな人々の交流を促進する貴重な機会を提供している。こうして静かで美しい田園地帯にある日殺人事件が起こる。そのコントラストと、舞台を *Midsomer...* 村という限られた範囲の場所に限っていることがハーディの小説世界と似ていると思うのだ。このシリーズが大変な人気を博したのも、そのあたりに要因があると思う。イギリスらしい景色、家、パブ、祭り、慣習、個性的な登場人物、様々な階層の人々の間で起こる事件など、飽きさせない内容である。

悲劇を描く一方で幸福な要素や喜劇的な要素を織り交ぜるのは、物語を彩りよくする意味で、とても大切だと思う。上記ドラマで言うと、しょっちゅう、殺人事件に向き合わなければならない警部の家庭が、とても円満で幸せなので、観ている者も安心できる。彼の家自体、明るい内装で、過ごしやすそうな庭付きの一軒屋である。妻や娘も、それぞれに様々な経験や交流を持ち、彼女たちの世界を通して別の世界を知ることができる。

ハーディの小説においても、例えば、酔っぱらったテスの父親が登場する冒頭の場面などは、とても喜劇的で面白い。テスも若さと美しい容姿に恵まれ、ある時点までは幸せだったのに、ほんのちょっとしたきっかけで運命が変わってしまうのだ。『狂乱の群れを離れて』においても、バスシバの農場使用人たちが飲みながら交流をする場面は、本当にユーモラスだ。バスシバにとっても、平穏な日常が続くかと思われたが、リディとのゲームの結果、バレンタインカードを送ったことで、真面目な農場主ボールドウッドを悩ませることになり、彼女自身大きな悩みを抱えることになる。そして、トロイとの恋愛によって、さらに彼らの関係性は悲劇へと発展していく。

そのトロイが結婚後、バスシバの住む古いカントリーハウスを好きになれない様子は印象的である。美しく修復され、ドラマの舞台として登場する豪華な邸宅や、ナショナルトラストの管理下にあって公開されている邸宅は、明るく立派に見えるものが多いが、実際に住んでいた時には、特に 19 世紀のように、まだ電気の照明がなかった時には、陰鬱でしかなかったかもしれない。『虚栄の市』や『ジェイン・エア』に登場するカントリーハウスは陰鬱で、決して良いイメージでは描かれていない。

先日、文学の授業の一部で、カントリーハウスの説明をするのに、かつて訪れたことのあるチャッツワースの写真を以前作成したパワーポイントのスライドで見せた。チャッツワースはダービシャーに位置する巨大なカントリーハウスである。この家で最も印象的だった場所の一つが大広間で、初代当主デボンシャー公爵 1 世 (1641-1707) が当時の王族ウィリアム 3 世 (1650-1702) とメアリー

2世（1662-1694）が来ることを期待して、彼らを称えるメッセージを込めた天井画を描かせたということで、豪華絢爛である。また、二階の特別な寝室も、凝った内装が施され、立派なベッドが置かれたが、彼らが来ることはなかった。

時期を同じくして、本エッセイを書いていた時、別の学会用に書評も書いていて、その本がヴィクトリア朝の女性の性と身体についてのことだったので、授業でチャッツワースの写真を見せた夜、どういうわけか、その二階で見たゴージャスなベッドが頭から離れなかった。もっとも、そのベッド自体はチャッツワースの初代当主が抱いた夢以外訴えてはこないのだが、チャッツワースを舞台にした映画 *The Duchess* の内容が思い出された。18世紀にデヴォンシャー伯爵と結婚して伯爵夫人となった女性が女兒しか産めないことで、苦悩する話だ。イギリスの伝記作家、アマンダ・フォアマンによって書かれたデヴォンシャー伯爵夫人（1757-1806）の伝記をベースにしている。カントリーハウスの寝室とは対照的に慎ましいハーディの生家の二階の寝室に置かれたベッドも思い出された。ハーディの生家がナショナルトラストの手に渡った時、家具の無い状態であったということなので、今あるベッドは新たに置かれたものであるが、それでも、そこで彼が生まれたことをイメージさせるのには役立っている。ベッドはもちろん体を休ませるためのものでもあるが、生殖、出産、臨終と様々な意味合いを持つ場所であることを思いださせる。そして、どのようなベッドであろうと、そこで生まれる悲しみや喜びに大差はないのではないだろうか。

さらには、カントリーハウスという言葉から連想される一般的イメージからはかけ離れた、かなり質素な“Donington le Heath”というカントリーハウス（レスターシャーに位置する）に行った時のことが思い出された。寝室に置かれたリチャード3世にまつわる伝説のベッドが興味深かった。ボズワースの戦いに行く前に休んだベッドということで、一時期はある宿に置かれていて、多くの人が見に来たということなのだ。あまりにベッドが有名になったので、代々受け継がれ、最終的にはヘリック家の手に移り、ベッドのために特別な寝室が作られたという。そしてそのベッドは長期に渡って、ヘリック家からお借りしているものだということである。古いものを保存しておくのは、場所もお金も必要で大変だが、それにまつわる歴史を伝えることでもあるので、意義深いと思う。ベッドを見て、こうした伝説の説明文を読んだ時、今はいない無数の人の姿が見える気がした。

ハーディの詩“Self-Unseeing”では、語り手はかつて家族が暮らしたがらんとした家の跡を訪れ、過去を回想する。今から思えば誰もが輝いて見えて、幸せこの上ないのに、誰もそのことを認識していなかったと気づくのだ。現在の幸せをかみしめておくことの大切さを教えられた点で、とても印象深い詩の一つである。時の経過は止められないからこそ、過去を回想して懐かしむというのも、大切な事なのではないかと思う。

研究における私的な視点

福原 俊平

(FUKUHARA Shumpei)

私にとっての「協会ニュース」の魅力としては、「ハーディと私」に代表されるように、研究者としてのアカデミックな関心の背後にある一人の人間としての部分が垣間見られるところがある。

私自身も「ハーディと私」と「ハーディと私 その後」を書かせてもらい、それぞれ大学院生時代と7年前における私にとってのハーディへの主な関心点を書かせてもらった。

私は近年、ハーディにおける共感の問題を中心的な研究テーマとしている。とりわけ、ハーディの動物愛護の精神との関連から、登場人物と動物の間に生じる共感を取り上げることが多かった。そして、来年出版予定の日本ハーディ協会論文集では「ハーディと動物」の項目を担当させてもらっている。日本にいる多くのハーディ研究者の中でこのテーマを任せていただいたことは、私のこれまでの動物論を評価していただいたということであろうから、とても光栄なことである。他方で、私自身は動物愛護運動にかかわりがなかったところか、ペットも飼ったことがなかったため、「こんなに動物愛に欠けた人間が、なぜこのテーマで研究してきたのかだろうか？」とふと疑問に思ったこともあった。

私はもともとハーディの作品テキストや思想には強い関心があるものの、伝記的な研究にはあまり興味が持てないところがある。ハーディの作品における動物描写に惹かれ、動物の苦痛と登場人物の苦境が有機的につながりあう共感の絆の描き方はたいへん魅力的だと感じている。そして、その背景にハーディの進化論解釈があることはとても刺激的だと感じる。他方で、ハーディ自身のペット歴などの伝記的な部分については、目を向ける「必要性」を感じるという程度であった。そのため、ハーディが愛したペットの「知識」は多少あっても、関心の対象とは言い難かった。

ところが、ハーディ小説に触発されたのかどうかは定かでないが、私の中にも動物愛が生まれてきた。あるとき、動物を見て胸が高鳴るような感覚が生じたのだが、あまりにも意外な感情であったため、それが理解できなかったほどである。そして、ついにこの6月から犬を飼い始めた（「迎え入れる」というのがペット界限では正しい表現らしい）。ちなみに犬種はマルプー（マルチーズとトイプードルのミックス犬）である。実際に新米飼い主となると、ハーディの犬たちについても、より実質的な関心が出てくる。ハーディもトイレ・トレーニングに悩んだのだろうか？散歩のコースと時間は？そういえば、マックス・ゲートを見学に行ったときに、地元の人たちに話しかけられることなく犬の散歩ができるようにと作った邸内の散歩コースをガイドさんが紹介してくれたが、愛犬はあれで満足したのだろうか？などとアカデミックではない疑問が湧いてくる。

新米飼い主としては、飼い犬の（人間から見た）問題行動に悩まされる。ただ、その「失敗」のあとの無邪気な表情を見ていて思い浮かぶのは、『はるか群衆をはなれて』でゲイブリエル・オークの羊の群れを転落死させたあとの牧羊犬の描写である。私の被害はオークのそれとは比べ物にならないほど些細だが、犬が身近にいるからこそ感じるリアルさもあるのかもしれない。また、問題行動と言えば、ハーディの愛犬ウェセックスである。ご存じの通り、乱暴な振る舞いにもかかわらずハーディが溺愛し、2編の詩を捧げた愛犬である。マックス・ゲートのツアーでも、いろいろな人に噛みついたり、テーブルにまで上がってお客さんの食べ物を奪い取ったりしたエピソードなどが紹介されていた。以前の私は犬種を気にしていなかったが、ウェセックスがワイヤーヘアード・フォックス・テリアというのはひっかかる。現代日本のペット情報としては、必要な運動量が多く、頑固で家族以外への警戒心が強い「テリア気質」により、初心者には飼育の難易度が高いとされる犬種のはずである。初心者ではなかったが、ハーディもしつけの失敗を多少は感じていたのかもしれない。*The Life and Work of Thomas Hardy* で、ウェセックスの欠点を“due perhaps to a want of thorough training” (461) という表現をしていることから、「自分は甘やかしすぎているのではないか？」という多くの飼い主が感じる不安をハーディと共有している気がしてくる。

ここまで駄文を連ねてきたが、無理やり教訓めいたことにつなげると、私がこの経験で感じたのは、私的な部分と研究の際の視点は意外と切り離せないということだ。それをさらに宣伝につなげると、今年度のハーディ協会大会では土屋結城さんの発案で「ハーディと食」というシンポジウムがあり、今村紅子さんと一緒に私も登壇させてもらうことになっている。食は私的なものであると同時に、会食のように社会的なものでもある。つまり、公と私が混ざりあう領域であると言える。私はこれまで登場人物の食生活に注目して読んだことはあまりなかったが、意識して読むと新しい発見がある。次の大会ではそれをご紹介できればと思う。

「ハーディとクラシック音楽」再考

鈴木 淳

(SUZUKI Jun)

「ハーディと音楽」というテーマは、これまでも批評家たちによって取り上げられてきたが、いわゆるクラシック音楽とハーディ作品の関係の研究はそれほど多くないように思われる。¹ 最近でも *The Edinburgh Companion to Literature and Music* (2020) のなかでジョン・ヒューズ (John Hughes) がハーディ小説における音楽の機能を論じているが、クラシック音楽の作曲家との関係で論じられたものではない。

この点について、ノーマン・ページ (Norman Page) が編纂した *Oxford Reader's Companion to Hardy* (2000) の Music の項目を見てみると、クラシックの作曲家とハーディの関係性については、ビゼーやヴェルディのオペラを除けば、ハーディの音楽知識や理解はジョージ・エリオットのそれとは異なり、主にハーディにとっての音楽は子どもの頃に聴いた「地方の音楽」や「村の音楽隊の奏でる踊り」、そして「教区聖歌隊のレパートリー」であったことが記されている (285)。

しかしながら、このような評価の一方で、ハーディ作品には少数ではあるが、クラシック音楽、しかも「交響曲」の名曲が登場する。したがって、本エッセイでは、交響曲という観点からハーディ作品とクラシック音楽の関係に注目し、そこからハーディのクラシックに関する音楽観を再考してみたい。

まず始めに、ハーディ作品とベートーヴェンの交響曲から確認していく。ハーディのセンセーション小説として知られる『窮余の策』(*Desperate Remedies*) において、マンストンがシセリアにオルガンを弾いて聞かせる場面があり、マンストンは最後にベートーヴェンの交響曲第6番『田園』を弾く。これは、『田園』第5楽章が「嵐の後の喜びと感謝」を表した音楽であるため、マンストンは自分たちの状況に合わせてこの曲を弾いたと思われる。だが、マンストンのその後の人生（センセーション小説の悪役となり、最後は監獄で自殺）を考えると、ハーディによる牧歌的自然描写を描いたベートーヴェンの『田園』という選曲は実はテキストにおいて非常にアイロニカルな効果をもたらしている。

次に、ハーディ小説と当時の新しい交響曲の「終わり方」の類似をハーディのモダニティと論じた先行研究を紹介したい。ロバート・シュエイク (Robert Schweik) は、かつてハーディの『日陰者

ジュード』(*Jude the Obscure*)とチャイコフスキーの交響曲第6番『悲愴』の最終楽章の結末の「著しい構造上の類似」(92)を指摘した。それまでの交響曲では、最終楽章のフィナーレは盛り上がって終わるのが常だったが、チャイコフスキーの第6番はゆっくりと静かに消えるように終わる。シュエイクは、これがハーディの『ジュード』の結末と同じであると言う。さらに、シュエイクは、チャイコフスキーが残した第6番に関するメモには、ハーディが『ジュード』で描いたのと同じ、「最初の衝動的な熱情と信頼」が「幻滅」、「希望の挫折」、そして「死」へと至る人生観が書かれていたと述べる(92)。シュエイクは、ハーディが「近代文学だけでなく近代音楽における後の発展で多くのヴァリエーションで顕著に現れるテクニックを採用した先頭だった」(93)と論じている。

一方で、ハーディの詩では、モーツァルトの交響曲が登場する。ハーディは、「モーツァルトの変ホ長調交響曲のある楽章に合わせた詩行」(“Lines to a Movement in Mozart’s E-Flat Symphony”)という詩を書いている。ハロルド・オレル(Harold Orel)は、ハーディがこの詩のなかで妻エマとの幸せなロマンスの瞬間を再現しようとしていると述べる(39)。*Oxford Reader’s Companion to Hardy*では、第5詩集『映像の見えるとき』(*Moments of Vision*)について、ハーディが「物事や思考や感情の表面上のカオスにパターンと意味を見つけ出そうとしていた」(279)と記されていて、このモーツァルトの交響曲に合わせた詩もそのような目的を持ったうちのひとつとされる(279)。ここで興味深いのは、ハーディがモーツァルトの交響曲第39番(変ホ長調 K543)に感じ取ったロマン主義である。一般的には、モーツァルトはハイドンと同じウィーン古典派に分類されるが、なかには次の時代のロマン派的性格を指摘する音楽学者たちもいる。実際に、音楽学者H・C・ロビンズ・ランドン(H. C. Robbins Landon)は、モーツァルトの音楽の「ロマンティックな側面」を指摘し、モーツァルトの「純真さというものがあるとすれば、何かを失って、二度と戻ってこないものを悲しげに思い出している人のそれである」(142)と述べる。ハーディがモーツァルトの交響曲に感じ取ったのも同じ感情であり、ハーディの詩では、スタンザが進むにつれて、過去の「再現」を求める時間の単位が小さくなっていく。それは、「あの時」(the time)で始まり、「あの日」(the day)、「あの時間」(the hour)、と進み、「あの出来事」(just this)で終わる。²だが、「あの接吻の瞬間」という出来事の再現を求める第4スタンザでは、時間的には最小単位ながらそこには詩人の最も強い願いが込められている。18世紀末のモーツァルトの交響曲に潜んでいた失われた過去の幸福の再現への希求の感情は、こうして一世紀以上後にハーディのロマン主義的な詩のなかで言葉で表現されたのである。³

以上、ハーディ作品に見られるクラシック音楽について、先行研究の紹介も交えながら確認してきたが、ハーディのクラシック音楽への理解や感覚は、従来の批評で言われてきたものとは異なり、非常に鋭く、時代にも敏感であったことが分かる。ハーディは、それぞれの曲の本質や音楽の時代的特徴を的確に見抜き、自らの作品で非常に効果的に用い、そしてさらには音楽の解釈から新たな創造をしていた。

注

1. ハーディとクラシック音楽を論じた研究では、ハーディとヴァーグナーを論じた深澤俊先生の論文「ハーディと十九世紀芸術」がある。
2. ハーディの詩の日本語訳については、『トマス・ハーディ全集 詩集Ⅱ』を使用した。

3. ランドンは、モーツァルトの音楽がロマン派全盛期を迎える 1830 年頃まではほとんど知られていなかったが (143)、モーツァルトには「ロマンティックな一面があり、その故にロマン派が信奉された時代には、すべての詩人、音楽家、一般聴衆などが、モーツァルトの音楽を愛好したのであらう」(144) と述べている。

引用文献

Hardy, Thomas. *The Complete Poems of Thomas Hardy*. Edited by James Gibson, Macmillan, 1976.

---. *Desperate Remedies*. Edited by Patricia Ingham, Oxford UP, 2009.

Hughes, John. “Music in Thomas Hardy’s Fiction: ‘You Must Not Think Me a Hard-Hearted Rationalist.’” *The Edinburgh Companion to Literature and Music*, edited by Delia da Sousa Correa, Edinburgh UP, 2020, pp. 447-52.

Orel, Harold. *The Final Years of Thomas Hardy, 1912-1928*. UP of Kansas, 1976.

Page, Norman, editor. *Oxford Reader’s Companion to Hardy*. Oxford UP, 2000.

Schweik, Robert. “The “Modernity” of Hardy’s *Jude the Obscure*.” *Bloom’s Modern Critical Views: Thomas Hardy*, edited by Harold Bloom, new ed., Bloom’s Literary Criticism, 2010, pp. 87-101.

ハーディ、トマス『トマス・ハーディ全集 詩集Ⅱ』、森松健介訳、大阪教育図書、二〇一〇年。

深澤俊「ハーディと十九世紀芸術」『トマス・ハーディ全貌』、音羽書房鶴見書店、二〇〇七年、pp. 六五三-六五。

ランドン、H・C・ロビンズ『モーツァルトー音楽における天才の役割』、石井宏訳、中公新書、二〇二一年。

ハーディと私—研究の出発点

加藤 彩雪

(KATO Ayu)

日本ハーディ協会に入会いたしました加藤彩雪 (かとうあゆ) と申します。今回、『ハーディ協会ニュース』に寄稿する機会をいただき、とても嬉しく思っております。現在は、D. H. ロレンスやオーストラリアの女性作家の文学テクストを中心に研究をしておりますが、私の研究生生活の原点にあるのは、それらのどのテクストでもなく、ひとえにトマス・ハーディの小説でした。ハーディの小説を通して、文学を読むことやそれを批評することに興味を持ったと言っても過言ではありません。そして、研究者としての現在の私があるのは、ハーディ協会の坂田薫子先生のおかげでもあります。

大学2年生の時に、坂田先生のある授業のシラバスを読んでもみると、そこには『ダーバヴィル家のテス』という記載がありました。初めて耳にする長編のタイトルに恐れを抱きながらも、坂田先生の授業を受講することを決めました。授業は、毎回約3名が各々の担当箇所について調べたことや自身の考察を報告するという演習形式で行われました。本を読むのは子供の頃から好きでしたが、1冊の本を丁寧に精読してディスカッションをするのは初めての経験でした。確かに、授業での報告に向けて上質な英文を読み批評するのは、非常に骨の折れる苦しい作業でした。

しかし、1人で静かにテキストと対峙する時間は、驚くほどあっという間に流れていきました。そして次第に私は、ヴィクトリア朝という時代への興味はもちろんのこと、ハーディの使用する言葉の豊饒さに魅了されるようになりました。特に私は、“home” “pure” “dream”をはじめとする何気ない単語に目配りをしながら、それらの語彙にハーディが託した意味や思想を考えることに没頭しました。特異な使われ方をされている語句に気が付いた時や、テキスト内である言葉が意味を変えて登場することに気が付いた時には、これまでの読書では味わえなかった知的な感激を覚え、ますますイギリス文学を原文で読むことに興味を持っていきました。個人発表の後には、坂田先生が目の覚めるようなご指摘をくださり、より広い観点からテキストを読むことができました。このエッセイを書くにあたり、当時使用していたペンギン版の『テス』を開いてみたのですが、そこにはたくさんさんのメモが残されており、この小説が私の研究者としての原点になっているということを改めて実感しました。

私事です、2022年に日本ロレンス協会にて企画された「D. H.ロレンスと言語表現の獨創性」というシンポジウムに登壇しました。このシンポジウムでは、ロレンス独自の言語表現に登壇者が1つずつ紹介したのですが、私は彼がテキストで繰り返し使用した“darkness”という単語を取り上げて、その意味の変遷を時代横断的に考察しました。この報告に向けて準備を進めていると、大学時代に受講した坂田先生のハーディの授業での読書体験がふと思い起こされました。ハーディの自然描写の中に登場する“darkness”とロレンスのそれを重ね合わせたり、それらの相違点を見つけたりしながら、これからもテキストに誠実に研究を続けていきたいと強く思いました。

ハーディ協会入会後に私が読み返した彼の小説は、『日陰者ジュード』でした。特に今回私が注目したのは、苦しむ動物に対して見せる登場人物のある種の優しさでした。家畜の動物や野生の兎へのジュードのまなざしは、ロレンスの登場人物を私に連想させ、両作家の間には響き合う何かがあると感じました。周知の通りロレンスは、『トマス・ハーディ研究』というエッセイを執筆しており、ハーディの小説から学んだ思想を自身の小説に組み入れていたと考えられます。両作家は、労働者階級と中産階級どちらの価値観もテキストに描きましたが、「結婚」もまた両者のテキストの要となる主題だと思われます。ロレンスは、ハーディよりも40年ほど後に生まれ、その大胆な社会批判故に発禁処分を受けたこともあるため、社会の異端児と見做されがちです。しかしながら、20世紀初頭に書かれたロレンスの小説のほとんどは、結婚という枠組みの中で展開されます。彼にとっての最大の他者である「女性」との関係は、結婚という制度と密接に結び付けられて描かれるのです。このようにロレンスは、ハーディと異なる時代を生きましたが、彼のテキストの根底には、ハーディと通じるものが多々あるように思われてなりません。

今後は、ハーディがロレンスに与えた影響のみならず、ロレンスがどうしても受け入れられなかった彼の思想を明らかにさせながら、私の研究の原点であるハーディのテキストに誠実に向き合っていきたいと思っています。

《シンポジウム予告》

ハーディと食

はじめに

土屋 結城

(TSUCHIYA Yuki)

2020年に発生した新型コロナウイルスのパンデミックにおいて、奇妙にも注目を集めた行為に食がある。黙食や孤食という聞き慣れぬ言葉が広まり、一方でその動きに対抗するかのようにな食、縁食という言葉も生まれ、食が果たしていた社会的役割に改めて光が当てられた。

食という行為の文化的、社会的な側面に注目し考察を始めたのは人類学や社会学であると指摘されるが、現在では学際的な広がりをもって論じられる題材である。ハーディ作品においては、2017年に *Food in the Novels of Thomas Hardy: Production and Consumption* を著した Kim Salmons が、作品中の食への言及を通して 19 世紀イングランドの歴史的、社会的、政治的変化を論じることができると述べており、文学作品の読解においても興味深いテーマであることを示した。

本シンポジウムでは、司会者を含めて 3 名の講師からハーディ作品における食の問題、表象を多角的に提示し議論を深めたい。

蜂蜜酒の紐帯——“The Three Strangers” を中心に

土屋 結城

(TSUCHIYA Yuki)

文学作品における食というテーマについて中川僚子は「食というあまりに日常的な営みは、そのあまりの日常性のゆえに、思索の対象として問いを立てにくい」と述べており、ハーディの作品研究においても Kim Salmons が “food itself has, until now, largely remained the critically ‘unseen’ in Hardy’s novels.” と指摘するなど、食というテーマが軽んじられてきたことが示唆されている。一方で、それゆえにこそハーディ作品における食はなお未開の領野であるとも言い得るのであり、そこから得られる新たな読みの可能性は決して小さくない。

本発表では、Carolyn Korsmeyer が食について “One of the most significant roles of food is social: eating is part of rituals, ceremonies, and practices that knit together communities” と指摘する役割、すなわち共同体の人々を結びつける、あるいは切り離す役割を果たしている点に注目し、その観点から新たな読みの可能性を含む “The Three Strangers” を取り上げる。中でも象徴性に富む蜂蜜酒（ミード）が共同体において果たす役割をハーディの他の作品も参照しながら考察したい。

The Mayor of Casterbridge を「食」から読み解く——小麦と穀物法

今村 紅子

(IMAMURA Beniko)

The Mayor of Casterbridge (1886) の 1912 年の序文において、ハーディはカスターブリッジとその近隣の地方都市でも実際におこった「妻売り」の事実、また「穀物法 (Corn Laws)」の撤廃直前に襲った凶作について、歴史的事実を切り取って小説内時間で描いたことに言及していた。近世イギリスの民衆社会におけるコミュニティの連帯、異分子に対する制裁としての妻売りやスキミティラ

イド、主人公マイケル・ヘンチャードの成功と没落が、イギリスの穀物取引事情を背景とした社会情勢のなかで、民衆の猥雑さや因習と相まって悲劇を生みだした。本発表では、furnity や小麦をめぐる「食」にかかわる文化的、歴史的要因が、ヘンチャードの破綻をもたらす本作の複雑なプロットの鍵となり、共同体の規範からの逸脱へとつながることを考察する。

Food in the Novels of Thomas Hardy (2017) の Kim Salmons によれば、ヘンチャードの悲劇について描かれた歴史は直線的な経路をたどるのではなく、フォークロアや神話の再構築に基づいているという。「穀物」がこの循環性を象徴しているのだ。本作における「食」の神話的、隠喩的な文脈については、ジェームズ・フレイザーの *The Golden Bough* (1890) における the corn spirit/king とヘンチャードを重ねている。収穫が終わると殺され、春になると新たな王が誕生するその再生の物語は、歴史的、先祖伝来の伝統が近代化によって置き換えられていくカスターブリッジの物語と通底する。

***Jude the Obscure* における食材のシンボリズム——豚肉・酒・パン・卵**

福原 俊平

(FUKUHARA Shumpei)

食に注目して *Jude the Obscure* を読んでみると、ハーディは細かなところにまで意識して食材に象徴的な意味合いを持たせ、登場人物の対比効果を高めるために用いていることに気づく。豚肉と酒は本能的な欲求と結びつけられ、アラベラ親子の描写においてはそれらとのつながりが繰り返し強調されている。他方で、ジュードはパンとの結びつきが強調され、少年時代から大学で学ぶ夢が破れた後まで、パンは学問への希求を表すものとして描かれ、アラベラ親子の豚肉と酒と対比される。また、アラベラとスーは対照的な人物として造形されているが、そこでも食材を使ってコントラストが強調される。鳥と卵はアラベラとスーのどちらにも関連付けられるが、その意味合いは正反対である。アラベラがジュードを誘惑するために卵を使っているように、卵は女性の fertility と結びつけられるが、スーに関しては、リトル・ファーザー・タイムの自殺と子殺しに気がつく前に卵を茹でており、孵化する前の卵と茹でられた卵という形で正反対の使い方がされている。

本発表では、これらの食材が登場する場面を読みながら、ハーディの細部にまでこだわった食材のシンボリズムを例証し、ハーディ研究における食のテーマの可能性の一端を示したい。

《特別講演予告》

連形式による語りの可能性の追求：ハーディ詩に おける連 (stanza)

神戸女子短期大学教授・京都大学名誉教授

桂山 康司

(KATSURAYAMA Kohji)

ルネサンス期における叙事詩の形式をめぐる多様な模索の中で、Homer にまで淵源する stichic な形式—例えば blank verse—が優勢となり、イタリア詩人や Spenser による stanzaic な語り口の試みは

叙事詩形として本流とはならなかった。一方で、抒情詩形の代表である sonnet はむしろ sequence として書かれ、語りの要素が強化された。Stanza 形式における脚韻による統一性の付与は、抒情的高揚感の表出には効果的だが、一方で、それは同時に、ダイナミックで遠大な物語の進行にとっては停滞を意味する。

19 世紀になり、詩が小説にその地位を奪われ、それでもなお書かれ続けられた際の重要な焦点のひとつは脚韻であった。Byron の風刺詩における脚韻の巧みさは感嘆のうちに模倣され、ヴィクトリア朝には、脚韻の整然とした連続を競うかのような詩—三行連句 (triplet) による stanza 形式の物語詩などが現れる。脚韻の洪水の最中であって、Tennyson の繊細な響きが愛好されるわけである。このような詩の頹廃期にあって、新機軸が G. M. Hopkins (1844-89) によって試みられるが、時代の受け入れるところとはならず、それが知られるのは、第一次世界大戦開戦を経て、初版詩集の出版 (1918) 後となる。

しかし、このように脚韻が脚光を浴びながらも、一方で、それと親和性が強いとされる stanza 形式それ自体における大胆な新機軸は、Hopkins における sonnet 形式における試みを例外として、詩人ハーディの登場を待たねばならなかった。ハーディは、当代のアンソロジーに集積された抒情詩の多様性をつぶさに検討し、生涯において 600 を超える、新しい stanza 形式を造形した。この抒情詩形における圧倒的な生産性は、単に詩人の創意工夫による努力によるというだけでなく、詩の内容と形式についての詩人の独自の知見があつてのことと想定できる。今回の発表は、その推定の試みである。

《内外ニュース》

会員による著書：

安達秀夫著、電子書籍版『「ダーバヴィル家のテス」とヤヌスの神話—双極のドラマトゥルギーの謎を解く』(22 世紀アート、2024 年 4 月)

《編集後記》

協会ニュース第 96 号をお届けします。冒頭の写真は、今年 7 月 28 日から 8 月 3 日までドーチェスターで開かれた Hardy Conference and Festival に参加中に撮影した現地ハイ・ウエスト・ストリートの早朝の様子です。この通りには、ハーディ関連の展示コーナーがある Dorset Museum and Art Gallery や *The Mayor of Casterbridge* に登場するホテル The King's Arms などがあります。日々の仕事に追われ予約が望まれるイベントの情報を事前にチェックできなかったのですが、亀澤美由紀先生に出国前に色々教えて頂き、*The Return of the Native* にちなんだ “East of Egdon” ツアーと *Jude the Obscure* にちなんだ “Shaftesbury (Shaston)” ツアーに参加し、先生ともご一緒させて頂くことができました。亀澤先生にこの場を借りて感謝申し上げます。(ちなみに秋の大会のポスターの写真は、亀澤先生が撮影されたものです。)

研究発表に関しては、前回同様様々なトピックのパネル (合計 10 パネル) が設けられた中、エコクリティシズム的なアプローチ「木」や「動物」や「海」をトピックにしたもの—を用いた発表が多かった印象を抱きました。(自分が発表したパネルは主にハーディ作品の “Form” に焦点を

当てたものだったのに、質疑応答では3名の発表者それぞれの引用部に登場した鳥や犬といった動物を巡る質問・コメントが多く出され少し呆気にとられたのですが、これもこのようなハーディ批評のトレンドゆえだったのでしょうか。) 建築家アーサー・ブロムフィールドのもと、ロンドンで助手として働いていたハーディが鉄道敷設に伴う人骨撤去作業の監督をした Old St. Pancras Churchyard にあった“Hardy Tree”が2022年の年末に倒れたことに触れた講演もありました。ハーディにちなんだ自然の産物の消失を経験した今、エコクリティシズム的アプローチに対する関心がハーディ研究家の間でより高まる予感がしています。

ご多忙の中記事をご執筆くださいました方々に、厚くお礼申し上げます。今号もバラエティに富み、充実した内容の記事が揃いました。次号は2025年4月発行予定で、投稿の締め切りは2025年2月20日です。論文、随筆は2,000字程度、短信、個人消息は500字程度です。どうぞ皆さま、奮ってご投稿ください。(編集者の責任で内容を編集する場合があります。また、編集者と会長の判断で掲載できない場合があります。あらかじめご了承ください。写真を付ける場合は、被写体となった人物や撮影者等の掲載許可を得てからご投稿ください。著作権のある図版等については、あらかじめ掲載許諾の処理を済ませてからご投稿ください。) ハーディに関する著書、翻訳等につきましては編集者までご連絡ください。

日本ハーディ協会ニュース 第96号

HP公開日 2024年9月1日

編集者 金谷 益道

(KANAYA Masumichi)
